

国際情報都市

ロスの死角

大森実



国際情報都市

ロスの死角



大森実

国際情報都市 ロスの死角

定価 二二〇〇円

昭和六十年十一月十日 初版印刷
昭和六十年十一月二十日 初版発行

著 者 大森 実

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

T104 東京都中央区京橋二丁目一七

振替東京二二三四

©一九八五 検印廃止

ISBN4-12-001435-5

K	紫	砂	白	目次
G	の	漠	蟻	
B	雨	の	蠍	

203	141	65	3
-----	-----	----	---

装
幀

佐
藤

裕

白

蟻

1 ガイアナの弾痕

社屋は静かな住宅街の佇まいの中に建っていた。この社屋を囲むスタコ（日本でいうモルタル）の平屋住宅群は、かなり古びていた。ユーカリの街路樹が青く茂り、市当局の手入れはよく行き届いていた。サンタアナ・フリーウェイ（5号）を下りて直ぐ西側にある。誰にでも目につく『スター紙』の社名が、正面玄関入口の壁の中に、同紙の誇りと威厳を表示しているかのように収まっているが、建物も入口も新聞社の構えではない。小さな中西部の都市のローカル・テレビ局か化学薬品工場という感じがする。このごろ、この界隈の建物はほとんど黒ガラスの建物になっている。

「編集室は、日本の新聞社もこうなのかしら」と彼女はキイを叩く手をとめて、ふと考えこむことがあるが、それは、彼女が日本を離れて十年になるし、神戸外大を出てミゾリー大学の新聞学部で留学した動機の中に、ジャーナリストになりたい、という強い欲望があったとはいえ、迂闊にも、日本の新聞社に足を踏み入れたことさえなかったからだ。

アン・島崎記者に代って、日米双方の新聞社のニューズ・ルームの事情を知っている誰かが、彼女のこの質問に答えてやるとすれば、「大同小異だが、心配御無用！ あなたが働いているスター紙の方が、ずっと小規模だが、清潔で、能率的です。スタッフの数が少ないという点は比較の対象にはならない。スター紙のニューズ・ルームの方が特に能率的だという点、完全にコンピュータ化されているということでは、日本は遅れている」という回答を添えて、日米のローカル新聞社との相違点をあげることだろう。

戦前の一九三五年に現経営者の手に渡ったスター紙は、五七年に新社屋を構築した。敷地が広いため、社屋は白いスタコ塗りの平屋の建物である。駐車場のスペースはかなりある。模造大理石の石段を三段上って入口を入ると、右側が営業局で、左側の仕切りの奥にニューズ・ルームと呼ばれる編集局がある。ここが、アン・島崎という日本女性記者の職場である。

ロサンゼルス郊外のサンタアナ市という新興都市にあるため、部数の伸びは驚異的である。あつという間に四十万部を突破し、ロサンゼルス・タイムズ紙、サンフランシスコ・クロニクル紙に次ぐ、カリフォルニア州第三位の発行部数を誇るにいたったが、紙面の内容はローカル紙としては断然おもしろい。彼女もそう自負しているし、読者もそれを認めているのだろう。ハースト系のエキザミナー紙を食った。サンベルトと呼ばれるロサンゼルス南方の郊外への企業や人口移動だけが、この新聞の部数を急激に伸ばしたとはいえない。

アン・島崎は机上のコンピュータの画面の中に映し出されている細かい英文文字を見つめていた。それは、自分が打った記事を読み返していたことになるわけだ。

「まあ何てことなのよ。アメリカは、毎日、毎日、血の池地獄に落ちてゆくみたいだわ」と日本語で独語したが、隣席の白人記者仲間が、

「え、何だって？」ときき咎めたので、片眼をつぶって舌を出してから、両肩をすくめてみせた。「アン・シマザキ。スタッフ・ライター」というバイ・ラインの署名で書くことさえ恥しい記事だ、と思ったが、ビデオ・ディスプレイ・コンピューターという長ったらしい名前のブラウン管の画面の中にランニングで再映されている彼女の記事は、約千語の長文の事件ものだった。朝刊のトップは間違いなく約束されている。

『狙撃者が放った非情の散弾は、ちょうど、金曜日の授業が終って下校するため、校庭を横切ろうとしていた小学生めがけて、つぎつぎに発射された。女生徒一名を殺害、一名の男女生徒と教師二名にも重傷を負わせた。スナイパー（狙撃者）は、校庭を見下ろせる四十九丁目のアパートの二階のベイ・ウィンドウ（出窓）から、ショット・ガン（散弾銃）で子供を狙い撃ちにし、弾丸を撃ち尽くしてから自殺した。犯人はタイロン・ミッチェル（二八歳）で、先年、南米のガイアナで集団自殺事件を起こしたジム・ジョーンズのメンバーの生き残りだと判明した。犯行の動機は不明だが、隣人の話では、ミッチェルは粗暴な男で、麻薬常習者だったといわれる。一九七八年のジョーンズタウン事件で、彼は両親と数名の家族を失っている。

狙撃は午後二時二十三分に開始された。事件を急報されたLAPD（ロス市警）のSWAT（武装特別部隊）は現場に急行、アパートを包囲した。同部隊がガス弾を発射して、アパート内に雪崩れこんだのは午後六時かつきり。ミッチェルはアパート内の階段で倒れて死んでいた。凶行は

近隣の住人をパニックに陥れた。ミッチェルの隣室に住むヘルナンデスという二児の母親は、ミッチェルが狙撃最中に帰宅してきた十歳の坊やと三歳の子供を、バスタブの中に隠し、その上に自分の身を伏せて、三時間半も恐怖に戦^{おそ}っていた』

アンは、自分のデスクの三つ先の机で、この事件の関連記事を叩いている先輩記者のエディのビデオを、彼の肩越しにのぞいてみようという気になった。エディの画面は二つに割れていた。野球放送でよく使われる手だが、画面の右側には、エディに記憶装置から呼び出されたジョーンズタウン事件のメモが映し出され、エディは左半分の画面に、事件の解説記事を叩きはじめていた。

アンは彼の肩越しに、彼の解説記事を盗み読みした。

『心理学者トーランドによれば、この事件は多くのことを語ることができるといっている。自殺した犯人ミッチェルは、ガイアナで、彼の家族とともに、ジム・ジョーンズに殉死しようとしたが果さなかった。彼は九一三名の生き残り信者とともに、七八年十一月に帰国してきた。集団自殺が行なわれたとき、彼は人民寺院の歯科医のクリニックで治療を受けていた。それで生き残ったわけだが、帰国後、ミッチェルは警察の取調べを受け、完全なアリバイが立証されていた（ミッチェル弁護人談）……』

くすつと、出てきそうになった笑いを抑えて、アンはエディをからかってやる気になった。

「それで、ミッチェルは警察から釈放されたが、PCPの麻薬常習者となり、発狂して学童一三名を殺傷した。ロサンゼルスとガイアナの見境がなくなっただが、発狂者は、レーガン大

統領を狙撃した犯人や、パリで恋人の人肉を食った日本人と同様、イノセントで無罪放免となるはずであったのに、哀れ、彼はガイアナで死んだジョーンズと家族たちのあとを追って自殺した。まさしく、ロサンゼルス of 白昼夢であった。……エディ、これでどう？」と軽くエディの背中を叩いてから、わざとアンがカラカラと高笑いしてみせると、振り向いたエディは、険しい眼をして、

「早く帰れ！ この日本娘め！」と怒ったが、論説委員になり損ねた老記者のエディは、アンの父親のような年ごろで、決して、本気で怒りだしたわけではなかった。

アンが自分のデスクに帰ると、ブルペンの向こう側から、編集長のジョーが、

「アン、手があいてるね。APローカルSS28をビク・アップしてリライトしてくれ！」と叫んだ。学生時代にフットボールのQB（クォーター・バック）だったというジョー・エマソンは、まだ四十歳の若さである。デトロイトから移ってきたばかりだが、アンだけではなく、ニューズ・ルームの女性記者たちは、この編集長のことを『アンタッチャブル』の主演者のロバート・スタックのようにクールなハンサム・ボーイだと噂していた。

デトロイトでディボース（離婚）したとき、財産を半分なくしただけでなく、二人の娘も奪られたという孤独でエリジブルな独身者だが、彼の赴任後、彼に近づいた女性記者で、デイトに成功したものは一人もいなかった。いつも、朝刊の早版が締切られると、まだミシガン・プレイトをつけたままのサンダーバードで、ニューポート・ビーチの『玄海』に行き、イエロー・テイル（はまち）の刺身とカリフォルニア・ロールを注文し、軽く日本酒二本を空けて帰宅していった。

アンが『APローカル』をビデオの中に呼び出すと、予備選挙やデロリアン裁判の記事見出しに並んで、SS 28の番号は、「幼稚園のセックス・ケース」という見出しで映し出された。この記事の内容は、強く彼女の気を引いた。

『AP・ロサンゼルス』七六歳の老婆と元教師らが、現在は閉鎖中のマンハッタン・ビーチの幼稚園で、二歳の幼児をふくむ多数の少年少女を性的に弄んでいた廉で検挙された。同幼稚園の所有者バージニア・マクマーチンと、同女の名前をつけた幼稚園の、元教師メリー・シャンソン（五六歳）と、いずれも元教師五名——マクマーチンの娘と孫二人（男女）をふくむ——に対する強姦行為ならびに同種の性行為強要犯罪である。マクマーチンは逮捕されたとき、車椅子に乗ったまま手錠をかけられたという状態で、警察や関係者を驚かせている。

強姦や性行為強要は、少年少女の眼の前で、飼い猫を殺して怯えさせたりえて、輪姦、乱交行為に及んでいたものであるが、少年少女たちは、マクマーチン一家や教師を怖れて、帰宅後も両親に話さなかった。警察当局は同幼稚園の卒業生数百名を調査中なので、犯行容疑件数は拡大する見込みである』

真夏だというのに、背筋に戦慄を覚えたので、アンはイレースのキイを叩いて、思わず、このAP電を画面の中から一度は追放してみたのであるが、やはり、仕事は仕事である。アンタッチャブルの編集長の命令通り、リライトを急がねばならないと思った。それに早くリライトしてしまわないと、ジェフとのデートにも遅れる、と思って腕時計をのぞくと、彼女の華奢な左腕に巻きついていた豪華なゴールド・バンドのセイコー・クレドールの針は、六時まであと一五分しか

なかった。

2 チカノ・バリオ

リリーと静かな音を立てて、卓上の電話のベルが鳴ったのと、アン・島崎がマンハッタン・ビーチ幼稚園の児童虐待事件のライト・ストーリーをビデオ・コンピュータの中に叩き終ったのは、ほぼ同時であった。時計は七時前。また、ジェフは約束を遅らせるつもりだな、と思った。が、アンは助かった。そう思って受話器を握ると、低い声で、

「アン、今夜のデートはキャンセルにしてくれないか」と意外なことを告げられた。電話の主は、やはりジェフ・トーマスで、アンのボーイ・フレンドであった。

「なぜ？ ひどいわ」と、アンは不満いっぱいだった。

「どうしてもダメなんだよ。取材が夜中までかかりそうなんだ」

「あたし、行くわよ。手伝ってあげる。邪魔にはならないでしょ」というと、

「女のくる場所じゃない」と、きつい語調の拒否が返ってきた。ジェフは冷たく断りつづけたが、執拗にアンが「行くわ、行くわ」を繰り返すと、断りつづけたジェフも満更ではなさそうで、

「では、頼むとするか。危険な場所だけど、一人で来られるか？」と、うれしそうな声でいった。「待ち合わせの場所を決めてよ。ジェフ、いったい、どこからこの電話をかけているの？」

「ロサンゼルスだ」

「まあ、ロサンゼルスまで行って取材しているの！ オリンピック？」

「アン、きみはボイルス・ハイツを知っているね。イースト・ロサンゼルスだよ」

「知ってるわ。そうね、メキシカン・バリオ（地区）でしょう」

「そう、チカノ・バリオのど真ん中に、メルカド・センターという小さな広場がある。一番街を東へ真っ直ぐ行っただころだ。スタコ（モルタル）の家が並んでいるが、このメルカド・センターのラファイエルというレストランで待っている。ちょっと気の利いた店だ。大きなネオンの看板がかかっている店だから、すぐわかるよ。その店もファースト・ストリートに沿っているからね」と、ジェフは繰り返して、念を押してから電話を切った。

アンは、書き上げたマンハッタン・ビーチ幼稚園事件の原稿を編集長のジョーに渡すと、すぐ振り向きもせずに正面玄関を飛び出した。編集長にきついことをいわれるのがいやで、いつもそうすることにしていた。白い麻のブラウスにグレーのスカート。同色に近いハイヒールをはいていたが、そういう単純な服装が、彼女のやや彫りの深い顔と長い黒髪によく調和していた。

アンは買い求めたばかりの赤いセリカのハンドルを握ると、405号（サンディエゴ）フリーウェイを、まっすぐ北へ、時速七〇マイルのスピードで飛ばした。カー・ラジオは、マンハッタン・ビーチ幼稚園事件が拡大しつつあるニュースを報じていた。

「警察当局は、更に児童強姦、輪姦容疑者の、男女元教師三〇名を逮捕した」

夕方になると、この405号フリーウェイの交通量は恐るべき渋滞状況となる。南へ向かう交通量だけは、いつものようにバンパー・ツー・バンパーのジャム状態であったが、幸いなことに、こ

の日に限って、アンが乗った北へ向かう四車線は、奇妙にすいていた。サンタアナからロサンゼルスまでは約四十五分の距離である。

ロサンゼルスのパーク・オブ・アメリカの名物の双子ビルが見えだし、四番街の出口でフリーウェイを下りたアンは、一番街に入り、『リトル東京』を抜けて、そのまま一番街を東へ向かった。

標高百五十メートルか二百メートルのなだらかな丘になっていた。

一番街が、通称『チカノ・バリオ』と呼ばれる汚れた地域に入ると、突然、彼女は、ニューヨークの黒人のいないハーレム（二五番界限）と、スパニッシュ・ハーレム（四、五十丁目界限）を混合したような特殊な街の変化に気づいた。メキシコ人は、壁のペンキを塗り変えるかわりに、絵具を使って人物や闘牛士の絵を書くのが好きだ、と聞いてはいたが、こんなにひどいとは思っていなかった。

道の両側のどの家も、壁いっばいに、アラモの岩でデービー・クロケットをやったサンタアナ將軍や革命家のサンディノなどの英雄の肖像や、カウボーイ、闘牛士、カストロ、ゲバラなどの肖像の壁画が、べつとりと描かれていた。壁画の展示市であった。

ジェフが電話で指定したメルカド・センターは、形ばかりの小さな広場であったが、すぐわかった。いろいろな店主の名前をつけたバナデリアン（パン屋）やカリセリアス（肉屋）、靴屋や衣料店が並んでいた。

「リトル・グアダハラだわ」と、彼女は独語したが、彼女は二カ月前に訪れた中部メキシコの

古都のことを思い出していた。不潔度の差はあるが、彼女の印象はあたっていた。

ボイルス・ハイツが栄えたのは十九世紀末期であった。初めは、オレゴン・トレイルを辿って東部からやってきた西部開拓者たちの成金ブルジョア街として拓けた丘であった。サンフランシスコのテレグラフの丘に相当するが、一九三〇年ごろ、大不況の初期に、ユダヤ人移民がここに入りこみだした。ヒトラーの追放でも、ユダヤ人移民の数が増えた。だが、そのころでもまだ、マックス・ファクター化粧品会社の重役たちの邸宅があり、アル・カポネと、東西で縄張り争いをして全米を震撼させたミッキー・コーエンという大ギャングもこの界限に住んでいた。

この界限で育って有名になった人物としては、前メキシコ大使のジュリアン・ノバを筆頭に、メキシコ系アメリカ人としてこの地区とゆかりがある人物では、民主党下院議員のロイバルや映画俳優のアンソニー・クインが挙げられる。ユダヤ人につづいてこの街に入ったのは、ロシア人移民と日本人移民であった。

そういう街が、汚れた『リトル・グアダラハラ』の特殊地区に変わっていったのは、ここ三十年ほど前ごろからである。ユダヤ人富豪やロサンゼルスブルジョアたちが、この街に入ってきたロシア人移民と日本人移民を嫌って、この界限から立ち去っていった後、一九五〇年代になると、ボツリボツリとメキシコ人が入りだした。ロサンゼルスでは彼らをチカノ、またはラティノと呼ぶが、チカノたちの繁殖率は驚異的であった。

このボイルス・ハイツ界限の九〇パーセント以上をチカノが占領したのは、一九八〇年代のカーター不況を迎えたころである。ロサンゼルス衣料産業や清掃業、庭園師業など、次いで、